

野長 ひとくごと

齊藤 譲

(22)

野ぎく

秋の深まった、十月半ばの夕暮れ時、久し振りに自宅近くの山の小道を歩いてみた。ついこの間までは、蒸すような夏の残暑の中で、草いきれがしていたこの小道も、いまではすっかりもの静かな秋の風情に様変わりをしていた。辺りの落木は、黄葉した葉を落とすはじめ、杉や松、椎などの常緑の木立も、どことなくくすんだ色合いに変わり、わずかな風の気配に、道端に伸びる芒が銀色の穂波をたて、落日の中で、アワダチ草の黄色い花が、一際目につくよう

についた。近よってみると、それはうす紫の野ぎくであった。枯れはじめた雑草の中で、寄せ合って咲くこの小さな花は、あくまでも清らかで美しく、一種犯し難い気高ささえ感じられた。私は、心を打たれるような感動に襲われ、なぜか涙が溢れてきてしかたがなかった。そのうちに「野ぎく」という唱歌が、自然に口をついて出てきた。

とおい山から ふいてくる
こさむい風に ゆれながら
けだかくきよく におう花
きれいな野ぎく うす紫よ
この唱歌は、たぶん私が小学校三、四年生の頃に教わったものである。遊びほうけていた少年時代であったが、なぜかこの唱歌は、私の心の中に

しつかりと住みついて離れないのである。歌っているうちに、いつしか秋の野山を走り廻った子供の頃や、自分が今日まで生きてきた世界の色々な出来事、現在の生き様などが走馬灯のように頭を駆けめぐり、暫くはたった一株の野ぎくから離れることができなかった。眼下を見渡すと、収穫の終わった田んぼのあちこちで、稲わらを焼く煙りが地を這うように流れ、遠くの山端には三つ、四つと灯りがつきはじめていた。まるで井上靖が、少年期を描いた小説「し



の大詩人杜甫は、「悲秋」という語をよく使っている。杜甫が使う悲秋は、簡単に秋を悲しむなどといった薄っぺらな感傷ではなく、名声を博した前半生から一転して、長い流浪と生活苦から病の身となり、迫りくる老と親友の李白にも先立たれた精神的打撃に苦悩する万感の思いが、物悲しい秋にかけられているのである。

ところで、この悲秋という言葉が、今年の秋ほど自分の気持ちにぴたりすることは少ない。異常な天候不順によつて、夏期の観光も振わず、また米や野菜の不作は観光業や農家経済に大きな打撃を与えているのである。稔りの秋にしては、悲しい秋である。更に、激動の昭和史を編んでこられた天皇陛下が、長い闘病の床に就いておられる悲しい秋でもある。一日も早いご平癒を願わずにはいられない。

万感こもる今年の秋も、やがてやってくる冷たい木枯しの前に、一瞬にして、かき消されていくことであろう。

交響楽の集い

県芸術祭の行事として市川交響楽団公演が芸術の秋早々の十月二日に町民会館大ホールで開かれました。

南条小、日吉小が雨で延期していた運動会となり、鑑賞を予定していた子供たちには残念でしたが、一般も混じえて四〇〇人の入場となりました。

観客は、ドボルザークの「新世界より」をはじめとした名曲の演奏に聞き入っていました。ユーモラスな楽器の紹介もあって楽しい交響楽の集いとなりました。



▲演奏する市川交響楽団